

## 感情の志向性と感情の表現について ディルタイとフッサールを比較して<sup>1</sup>

上島洋一郎

### 0. 導入 感情の掴み難さ

感情はおおよそ二様に体験される。

感情の一つ目の様態は、その状態がいったいどういった種類の快不快であるのか、また、何に対するものなのか、さしあたりは捉える事が出来ない漠然とした体験である。この場合、我々はこの感じに促されてその感情が何を示すのか、より洞察的に把握しようとする。感情の二つ目の様態は、何によって引き起こされる感情なのかははっきりとした体験である。この場合、たとえば美術作品のように客観的な対象がそれと相関している場合には、その対象の価値評価や行為などがさらに引き起こされたりする。

ところでいずれの場合にも感情は言語によって表現されうる。たとえば「なんだか落ち着く」、「この絵は奇麗だ」など。

この感情表現は「しっくりくる表現」と「しっくりこない表現」とに分けることができるだろうが、両者を分ける基準は「習慣」（「獲得連関」）などの歴史性を持つ表現者の身体や表現媒体の文化コンテクストなどに依存しているだろう。

しかし、たとえ我々がある感情にしっくりくる表現を見つけたとしても、その表現によってさらなる体験（対象認識や意志行為の想起された体験や予期される体験）が呼び起こされうる。表現とともに体験は進展する<sup>2</sup>。

したがって感情の掴み難さは二重である。その一つは、曖昧な感情と思念する対

---

ディルタイ全集 (Dilthey Gesammelte Schriften) からの引用や参照箇所は GS. と略記し、またフッサール全集 (Husserliana) からのものは Hua. と略記したうえで、巻数をローマ数字、ページ番号をアラビア数字で示す。

1. 本稿は第九回フッサール研究会（2010年3月28日 関西大学飛鳥文化研究所）にて行った研究発表の原稿を研究会参加者および論文アドバイザーから受けたコメントをもとに加筆修正したものである。コメントをいただいた方々にここに感謝する次第である。

2. このように感情をその曖昧さや進展のもとで取り扱う限り、以下の議論はジェンドリンが捉える事象からディルタイとフッサールを批判的に考察するという方向性を含んでいる。ただし、ここではジェンドリンが問題の中心にした、感情に対する表現の相応しさの基準や進展の過程などについて論ずる余裕はない。

象のはっきりした感情が同じく感情と呼ばれていることにある。このことからすれば、フッサールでなくとも「両者には類的共通性の関係は認められず単に多義性の関係が認められるだけであろう」(Hua. XIX/1, 410) と言いたくなる。掴み難さの二つ目は、感情表現によって感情を含む様々な体験の進展が起こることにある。二様に体験される感情を表現しようとする、その感情が何であるのかがはっきりして来たりなにかそれとは別のものが現われてくるように感じられたりするといった進展が起こる。しかし、この第二の掴み難さがむしろそれら二様の感情、すなわち「志向的感情」と「非志向的感情」を同じく感情と呼ぶことを許しているのかもしれない。本発表では以上のような視点からこの志向的感情と非志向的感情の類的共通性を捉えてみたい。

そこでまずは志向的感情と非志向的感情として考えられるものはどんなものか、より詳しく考察してみよう。そして両者が表現されるということがどんな事態を示すのか、考察することで両者の相違をさらに際立たせてみよう。そうすると、この両者がなお感情と呼ばれうるのかを明らかにするはずである。本発表では価値事象のこうした特徴を明らかにするために、議論を次の三つの問いに向けて進めてみたい。

1. 志向的感情と非志向感情は体験にとってどのような役割を果たすのか
2. 感情は表現にとってどのような役割を果たすのか
3. フッサールとディルタイの価値論を問うとは何か

ところで、こうした問題を取り扱うためになぜフッサールとディルタイが比較されなければならないのか、この点についてあらかじめ三つの点から説明しておく。

まず、志向性概念に関するフッサールからディルタイへの影響について。ディルタイを表現概念の探求へと動機づけたのは、『解釈学の成立』や『詩人の想像力論』等によって精神的なものを把握する方法に関心が向かったということ以外に、フッサールからディルタイへの影響を挙げることができる。フッサールの『論研』を読んだディルタイは、自分のこれまでの思索とフッサールのそれとの近さを確信し、一九〇五年にはフッサールと会談を行い、またその年のアカデミー報告(『諸研究』)でしきりにフッサールの使う用語を明示的・暗示的に自身の思索に当てはめて発表する。そうした用語の一つがフッサールの志向性概念なのである。以下で見ると後期のディルタイの構造連関の考察においてこの志向性の適用が顕著となるが、それは同時に、感情の非志向的レベルの取り扱いの問題を自覚させることになり、さらには表現の問題へと向っていくことに繋がっている。こうした点で、感情の志向性・非志向性と表現を取り扱う本稿においては両者の志向性概念を確認する必要がある。

次に、デュルタイの表現概念自体にもフッサールの表現概念が影響している点も本稿が両者を連関させて考察する必要があると考える理由である。この点についても以下で考察していくが、『論研』と『イデーⅡ』におけるフッサールの表現概念の違いがデュルタイの影響によるものである一方で<sup>3</sup>、デュルタイもまたフッサールの表現概念を批判的に受容しながら後期の表現論を展開している。したがって両者の表現論は互いに参照させて確認する必要がある<sup>4</sup>。

最後に、両者の方向性の相違について。両者をここで取り上げるより積極的な理由は、こうして両者の影響関係を踏まえたうえでの両者が捉えている感情概念の偏差を明瞭にすることにある。こうした考察が後両者の価値論を問題にする際の足がかりを与えるとともに、価値論を超えた両者の哲学全体の解明にも寄与しうらう<sup>5</sup>。

## 1. 感情の志向性と非志向性

### 1-1. フッサールの『論理学研究』における志向的感情と非志向的感情

感情の掴み難さは第一にそれが何を指示しているのか分からない状態を含んでいることにある。こうした非志向的感情をデュルタイとフッサールはどのように取り扱っているのか。

フッサールは『論研』第五研究において、感情が志向性を持つかどうかについて次のように論じている。まずはメロディー (Hua. XIX/1, 402) やケンタウロスの絵画 (Hua. XIX/1, 405) に対して引き起こされる感情などを例にしながら、感情の志向性を基づけ関係によって説明する。確かにこうした例で示される感情は相関する表象 (音や絵) があって初めて生まれうるのであり、そうして感情が表象を価値づけることに繋がるだろう。それでは非志向的な感情とはどういったものか。フッサールが挙げるのは、火傷の痛みや突傷の痛みなどの「感覚的感情」(Hua. XIX/1, 406) で

---

3. 榊原哲也『フッサール現象学の生成』、東京大学出版会、2009年。なお、このほかにも精神科学と自然科学の相違、心的生の獲得連関、共同精神といった点におけるデュルタイからフッサールへの影響についても論じられている(263-276頁、表現概念については269-273頁参照)。

4. 意識の志向性と表現概念についての二人の影響関係についてはすでに論じたことがあるが、本発表での議論に必要な限りでそれらを再度取り上げている。拙論「デュルタイとフッサールにおける感情の志向性について」(『デュルタイ研究』20号(2009)、157-171頁)参照。

5. 『現代思想』第37巻第16号(青土社、2009年)のフッサール特集における研究諸論文が示すように、フッサールの価値論に関する研究の蓄積は進んでいるようである。ところで、とりわけ価値論という分野は当時の新カント学派の影響なども含めたドイツの学術的な風潮や影響関係についての重層的な考察を必要とするだろう。本発表ではフッサールからデュルタイへの影響を論ずることにとどまるが、それはさらにデュルタイからフッサールへの影響を探求するための足がかりにはなり、フッサール価値論に関する今後の研究に対しても少なからず資することになるはずである。

あり、これらは「知覚作用の呈示的内容」として対象的統握の拠り所として働く (Hua. XIX/1, 406)。例えばやけどの痛みはさしあたりただ痛みとして現れるが、それがどういった痛みなのか (疲れた痛みなのか、熱い痛みなのか)、体のどの部分の痛みなのか、といった把握を通してそれを引き起こしたものの対象的把握のための足がかりを与える。さらにフッサーは、非志向的な感情に基づいて統握される志向的客観がもはや無くなってもこの感情がしばらく持続しうる場合を挙げてはいる。その場合、「今はただ感ずる主観にのみ関係づけられるのであり、もしくはそれ自身が表象された、好ましい客観になっている」 (Hua. XIX/1, 409)。これは、もはや対象統握を終えてただその非志向的感情に身を委ねているような場合であり、フッサーは例を出していないが例えば肩もみをしてもらった後の余韻を楽しむような事態だろう。この場合、すでに肩をもむ手ははなれてもなお、その余韻はやはり肩もみという統握から離れることはないだろう。そうであれば、結局のところフッサーにとって感情は、基づけ関係を通して考察されており、その都度のあくまで外的対象の統握を核としたその前後に存しているのみで、そこから離れることはない。

## 1-2. デルタイの『諸研究』における非志向的体験と志向的体験

その一方、『論研』を読んだデルタイにとって意識の志向性は自らの現象性の命題と共通するものとして受容される。ただし、認識の根拠として掲げられる現象性の命題は『論研』を読む前後でその内実を変化させている。たとえば『記述分析心理学』(1894/5)では、現象性の命題とは次のような事実を記述分析心理学のための認識論的基礎づけとして示すものであった。「ある状態は私にとって現に存在する。たとえば私が悲しみを感じる時、悲しみの感情は私の対象ではなく、その状態は私に意識されることによって私にとって現にある」、つまり「私はその状態を覚知している」ということは「意識の事実」(GS. V, 197)である。私にとって悲しみが存在するのは、悲しみが表象によって対象化されることによって存在するようになるということではなく、その悲しみが感じられたままに体験されている (覚知される) ことによる。この場合、この悲しみが何に対する悲しみであるのか、ということとは悲しみの体験があるということにとって問われる必要がない。こうして、私にとって存在するものはいずれも私にとって事実であるという現象性の命題がこれまで主張されていた。ところが、一九〇六―八年の草稿ではこの命題が、「いかなる生の瞬間にも対象への我々の態度の関係が含まれている」(GS. XXIV, 5) こととして示されている。この二つの記述の違いが示しているように、それまでの現象性命題では私にとっての事実に関して志向性と非志向性の区別の問題とならなかったのだが、『論研』を読んだデルタイは現象性の命題をも志向的体験に限定してしまうのである。そしてこの現象性の命題の内実の変化に即して心的生の構造連関の捉え方もまた

かつてのものから変化している<sup>6</sup>。以前のディルタイでは構造連関の特徴が様々な表象や感情や意志が目的論的に連関することで一つの全体を形成することがその特徴として強調されてきたのに対して、1905年からの一連のアカデミー発表がまとめられた『諸研究』で示されているディルタイの関心とは、「発生的心理学的関係」(GS. VII, 35)「発生的関係」(GS. VII, 44)ではなく、「基づけ関係」(GS. VII, 35)「基づける作用と基づけられた作用の関係」(GS. VII, 44)によって形成・把握される構造連関にある。それゆえ構造連関が志向的な体験を通して説明される。その際ディルタイはこうした関係から見た心的生の記述のための準備概念としての、諸態度の「内的関係」、すなわち体験の志向性を明らかにしたフッサールの成果に自身の研究が多く負っていると謝意を示しつつ(GS. VII, 13-14)、次のように心的連関の形成過程を説明する。「心的体験にはある内的関係が生じるのだが、その関係において内容は対象的把握ないし感情ないし努力に対して存している。…(中略)…ある対象への知覚の関係、ある生起に対する痛みとの関係、善へ向けた努力——こうした体験は互いに明らかに異なった内的関係を含んでいる。どの関係様式もいまや各々の領域で時間的に切り離された諸体験の間の規則的諸関係をさらに作り上げる。そして最後に諸関係間にも規則的諸関係があり、こうした規則的諸関係を通して諸関係は心的連関を形成する」(GS. VII, 16)。さらにそうした志向的關係のもとで「対象的把握作用が感情の基礎を形成する」(GS. VII, 49)。

それでは非志向的感情はどのように扱われるのか。ディルタイの説明は例えば次のようなものである。「たとえある感情を呼び起こした主観的な位置や外的な対象が他の体験に煩わされてしまいもはや注意されていなくともその感情がなお持続しうるように、不特定なものに向かう内的な不快、目的方向を通して呼び起こされる緊張は感性的感覚や欲求それ自身が進行していなくとも欲求を代表象しているような感性的感覚に結合した感情において持続することができる」(GS. VII, 66-7) (欄外にフッサールへの参照箇所)<sup>7</sup>というように、ディルタイはここでもフッサールの説明を受け入れている。

ところで今挙げた非志向的感情は、我々が先に示したフッサールの二つの非志向的感情のあり方のうち、肩もみの例で示した一方の事態を指すだろうが、それでは呈示作用としての非志向的感情もそのまま受け入れられているのか。ディルタイに

---

6. とはいえ、このことからディルタイのこうした関心が発生的考察から静態的考察へ変化した、と判断することはできない。といのもこのアカデミー報告においては基づけ関係による静態的考察に問題を絞るとディルタイ自身が聴衆に注意を促しており、また後期のディルタイの考察は作用連関の考察に見られるようにむしろ動態的考察が研究の中心になっているからである。そしてこのことを象徴しているのが、一九一〇年頃に書かれた草稿における次のようなフッサールへの糾弾である。「態度様式、対象、内容といった抽象的実体を作り出し、そこから生を汲みなおそうとする。その極端なものがフッサール」(VII, 237)。

7. Hua. XIX/1, 396.

とって、「身体感覚」や「対象なき気分」(GS. VII, 50)といった非志向的な感情は構造連関の「下層の限界」(GS. VII, 50)であるとされているが、それらは呈示作用をもつものとしては記述されていないのである<sup>8</sup>。「身体的苦痛は心的生の下層にあるように、他の態度と並んで起こることがある。戦いにおける意志の興奮状態の中で、傷に気づかないように。対象を持たない気分もまた通常、他の態度の基盤をなすだけである。雲の後ろに隠れた天体が投げかける光と影のように」(GS. VII, 50)。つまり、他の志向的体験に対して基づけ関係のなかで働くものとしてよりも、基づけ関係からはみ出してしまうか、構造連関の形成に対して不確かな働きしか認めない方向にディルタイの記述は向っている。そうして、「この境界を越えたところで、感情体験は構造的統一体である」(ibid.)。したがって、ディルタイはフッサールに促されながら、非志向的感情を排除して志向的感情のみによって感情体験の構造論を遂行しようとするのである<sup>9</sup>。

### 1-3. 非志向的体験の把握の困難さと表現によるその克服

しかし、そもそも志向的な感情と非志向的な感情の区別を我々ほどの程度精密に区別できるのだろうか<sup>10</sup>。ディルタイもまたこの疑問に直面してしまい、『詩学のための断片』(1906-7年)の中で次のように語る。「ある種の知覚は規定された感情だとか、感情はただ規定されない感覚であるのかといった、体験のクラスについて我々は言及することができないのではないか。…(中略)… 体験された状態の境界付けは

---

8. 本稿は以下で、この非志向的感情的呈示作用としての触発とは異なった、体験の形成把握への触発に関して本稿はディルタイの記述の中から感情がもつ二つの傾向性を取り上げていくことになる。

9. ディルタイは『プレスラウ草稿』(1880-90年頃)の中で、触覚感情に見られるような客観と自己が不可分にある状態と快不快のといった仕方で客観へとかかわる意識状態として感情の二義性を説明しおり(GS. XIX, 107ff.)、非志向性と志向性の区別を覚知(Innewerden)と表象の区別として確かに理解していた。しかし、ヴォルフやヘルバルトが感覚や表象を自立した事実とみなして他の諸現象を導出できると考えたことをディルタイは批判し、こうした「ある特定の開始点」から事象を説明しようとする「説明心理学」を「放棄する」と断言する(GS. XIX, 112)。つまり、当時のディルタイが考察した心的生には基づけ構造が入る余地がそもそもないのである。そしてこの状況は九〇年代の心理学諸論においても変わらない。したがって、一九〇五年のアカデミー報告が非志向的な感情や欲求について『論研』の参考箇所(Hua. XIX/1, 408ff.)を指示しながら進められていることが示すように、ディルタイにとって基づけ関係の中で生じる非志向的感情的志向的感情的区別の問題はフッサールによって初めて導かれてきたと考えるべきだろう。

10. フッサールは「漠然とした憧れ」といった非志向的な衝動を論じた際、そもそも志向的なものとは関係ないのか、不定的なものを志向しているという風に捉えて志向的な衝動とみなせないか、と論点を挙げるにとどまっている(Hua. XIX/1, 410)。これは非志向的なものと志向的なものの区別に対するフッサールの困惑を如実に表している。なお、この区別に起因する問題をフッサールの哲学全体を通して位置付けようとした試みとしては、稲垣論、『衝動の現象学』、知泉書館、2007年。

曖昧なままである。内容との関係を持たない感情は存在するのか」(GS. VI, 318)。感情が持っているニュアンスの豊かさや曖昧さのために、心理学的記述は感情を知覚と意志から区別し、さらに志向的感情と非志向的感情に区別することができない。そこでディルタイは構造心理学を形成するために、必ずしも賢明ではない方法をとろうとする。「他の方法のみさらに進むことができる。その方法は媒介物を通して行く」(GS. VI, 318)。すなわち、表現されたものを用いて心的生の構造をとらえようというのである。というのも、「対象についての直観や概念(判断)、対象に対する感情、対象に向かう意図、対象への意図」などに見られるように、言語表現には常に「対象に対する主観の関係性」が含まれているからであり、それを通して構造心理学が形成されうると考えられるからである(GS. VI, 317) こうして、ディルタイは次のように語る。「私はある客観に対して肯定的な主観の状態にある体験の対象を価値と名付ける。客観に向かう主観の状態を目的と名付ける。このようにして、知覚、感情などを取り扱わない用語が成立する。…(中略)…我々は対象や感情の次いで活動するのでなく、価値、意義の中で活動するのだ」(GS. VI, 317)。フッサールを意識したと思われる引用最後の言い回しも象徴しているように(Hua. XIX/, 46)<sup>11</sup>、この時点までのディルタイに対するフッサールの影響はかなり大きい。ディルタイは体験の志向性という発想をフッサールから受容し、体験を捉えるために表現を用いるという一歩を踏んだのである。

#### 1-4. 非志向的体験はもはや顧慮に値しないのか

しかし、志向的な感情と構造連関、そして表現についてのこうしたディルタイの説明に対しては当然ながら次の二つの点で疑問が起こるだろう。第一に、志向的感情と非志向的感情を区別するのに表現を介するという方法はそれほど決定的な方法なのか、という疑問が起こる。むしろ、冒頭でも示されたように、我々の言語は非志向的な感情を表現する語彙を持ち合わせており、言語表現は志向的体験と非志向的感情の或る程度の目安としては役立つかもしれないが、言語表現が両者の区別を決定づけるものとはなりえないだろう。ところで、なぜそもそも志向的感情と非志向的感情の区別が問題となったのかを思い起してみよう。ディルタイの説明によれば、体験の構造連関が志向的体験の基づけ関係によって形成されるのであり、非志向的感情はそれゆえ構造論では排除されねばならないために、この区別が重要視されたのであった。ここで、より重要な第二の疑問が起こる。かりに非志向的感情が志向的感情から区別されるとしても、前者が構造連関に対してなんの役割も果たさないと本当に言えるのだろうか。そもそも、漠然とした不気味さや心地よさといっ

---

11. ディルタイは『諸研究』の中でも『論研』のこの箇所を明示しながら表現について説明している(GS. VII, 40)。

た様々な雰囲気が我々の嗜好や行動を様々な動機づけることを我々は日常的に体験している。たとえば、この研究会の中での雰囲気が発表者である私を緊張させるということは打ち払いたくともはっきりとしているし、聴衆者にとってもこの雰囲気が様々な影響を与えていることだろう。基づけ関係のみによって体験が構造化されるということはまずありそうにない。にもかかわらず、ディルタイの論述の中ではこの点が明示的に示されていないように思われる。実際、『諸研究』以降のディルタイも志向的体験の基づけ関係によって構造連関を意識化するという点に関心が向かっており、非志向的なものが構造連関とどのように関係するのか詳細に論じられることはない。例えば、『詩学のための断片』のすぐ後に記述された『価値論諸草稿』（1906-8年）は感情についてのディルタイの豊富な考察を与えてくれるが、それら草稿では主観的状态でありながら客観的なものの価値づけを可能にする感情やそれに関係する表現論が考察の大半を占め、したがって志向的感情の分析にディルタイの関心が向けられていることを示しているし、『歴史的世界の構成』（1910年）でも感情の非志向性・志向性の区別がはっきりと問われることはない。しかしながら、基づけ関係を前提とした構造連関についてのディルタイの記述には、以下で見るように、対象把握の前後にある漠然とした雰囲気や心地よさとは違うが、それでもなお非志向的な感情と呼びえるような感情の在り方が入り込んでいるのである<sup>12</sup>。

## 2. 表現にとっての客観化作用と非客観化作用

### 2-1. 構造連関の把握を動機づける感情としての非志向的感情

ディルタイは『諸研究』（1905年）において、これまで計画してきた仕事がかこれからの人生の中で完成させることができるのかを思い悩む自らの体験を記述しながら、「構造的意識連関」を説明する。

「私は対象に注意することによって、その感情状態の中にある構造的関係を区別する意識へともたらす。…（中略）…私の原稿についての表象が私の体験の把握の基礎であり、私はこの表象を注意深く分解する。私はこの対象的なものについての感情から、その基礎となる疲労の感情を分離し、そしてまた原稿の完成についてのその疲労の感情に基づく心配の感情を分離する。…（中略）…そしてまさにこの体験の統一の構造的本性によって、把握はさらに遡って過去におかれた構造に結合される諸体験に進むことを要求する。…（中略）…体験から体験の中にある構造的関係を通して心的連関へと進行していくことはその条件としての傾

---

12. 本稿での考察の方向とは異なり、我々がこれまで非志向的感情と呼んできた漠然とした雰囲気や心地よさを「気分」概念（および世界観）のもとで包括的にディルタイから読み取ることを示唆したのは、ボルノーであった。ボルノー、『ディルタイ その哲学への案内』（麻生健訳、未来社、1979年）を参照。



向性、すなわち底なしの体験を汲み尽くし、体験についての言及と体験それ自身の同等性を達成しようとする傾向性を示している」(GS. VII, 28ff.)。

さらに『価値論諸草稿』(1906-8年)でも同様な例を用いて意識的構造連関が説明される。

「体験についての言及は私が体験に注意することによって成立する。私がそこに何があるのか、と問う時に初めて体験についての言及が成立するのである。ここに精神科学にとってある重大な問題が横たわっている。私が夜中に起きていて、私が始めた仕事をこの年になって完成させられるかどうか心配し、その不安に苛まれる。その時に、対象的な把握が基礎となり感情そのものと対象的に把握された事態についての心配や苦悩とその事態を関係づける構造的な意識連関が成立している…(中略)…ある体験を汲みつくすため、構造体のなかで他の体験へと遡及してく」(GS. XXIV, 75)。

自らの仕事の完成に苦悩する体験という、感情面の際立った体験をディルタイがもっぱら例に用いて記述しているのは、ディルタイが構造連関としてそもそも問題にしようとしているレベルが外的対象の認識のレベルでないということを印象付ける<sup>13</sup>。さらにここで注目したいのは、ディルタイが二つの傾向性を語っている点である。第一の傾向性は、構造連関の形成過程がその都度の体験を超え出て過去の体験などの他の体験へと向かいながらその都度の体験を汲みつくそうとする傾向性である。ディルタイがこの傾向性を『歴史的世界の構成』の中で次のように語る時、構造連関を形成している分枝としての志向的感情とはいわば別の感情として、この傾向性を捉えることができるようになる。「このような一連の形で引っ張っていかれること(Fortgezogenwerden)は体験をくまなく捉える新たな分枝を要求することによる。そのさいに体験の感情の力(Gefühlsmacht)から起こる関心が協働しうる。この関心は引っ張っていかれることなのであって、意欲ではないし、少なくともシュライエルマッハー以来の弁証法が遡及していくところの知への抽象的な意欲ではない」(GS. VII, 140)<sup>14</sup>。純粹に知的な探究でも恣意的な意欲でもなく、いわば〈体験

---

13. 同様な例は『歴史的世界の構成』(1910年)でも取り上げられている。「私は夜中に起きていて、始めた仕事をこの年になって完成させる可能性について不安を感じ、すべきことを熟慮する。こうした体験において意識的構造連関が成立している。対象的把握はその基礎をなしており、対象的に把握された事態についての心配や苦悩についての見解ややり遂げようという欲求はそこに基づいている」(GS. VII, 139-140)。

14. ここでの「感情の力」という概念は、ある体験をそれとは別の体験に結び付けることによって汲みつくそうとする働きとして説明されているが、それ以上ここでは説明が加えられてはいない。しかし、『歴史的世界』の続編の草稿において挙げられる「力(Kraft)」という実在的カテゴリーについての説明が感情の力を解釈するのを助けてくれるだろう。力とは、単なる連想の戯れではなく、まだない何かを目標としてそれを実現するために個々のものを連関づ

を知ることを動機づける感情〉とでも呼びえるようなこの感情のもつ第一の傾向性が、構造連関を形成しつつ把握する際に働いているのである。さらに、この傾向性とは異なる第二の傾向性とは、その体験に相応しい表現を見つけて行こうとする傾向性である。私の苦悩の体験は「私は苦悩している」という表現によって完結するのではなく、その体験が他の体験へと遡及しながら問われつつ体験の連関を形成していくにつれ表現もまた形成されていく<sup>15</sup>。その体験はいったい何か、と問うことによってそのつど体験が汲みとろうとし、それに相応しい表現を模索することを動機づけるとすれば、我々は感性的感情などが持つ表象に対する触発とは別の触発をこの体験への問いのもとで語ることになるだろう。そして我々はこの感情を、それが基づけ関係によって形成されるのではなくむしろ基づけ関係による体験把握を触発する限り、たしかに感性的感情のもつ呈示の働きとは異なるが、それでもやはり非志向的な感情のとして、もう一つの傾向性である〈体験に対して適切な表現を見つけ出そうとする感情〉と呼んでよいだろう。

## 2-2. デルタイとフッサールの分岐点：感情の「表現」は真偽を問える「言明」か

こうした解釈はデルタイの表現概念をより詳細に見てみることで補強されるように思われる。我々は先にデルタイがフッサールの志向性概念を受容し、志向的感情と非志向的感情の区別の困難さを感情表現によって克服しようとする様子を確認した。そうした様子からすれば、デルタイがフッサールの思想をそのまま受容しているような印象を受けるかもしれない。にもかかわらず、デルタイがフッサ

---

けていくことである。すなわち、「力とは精神科学において体験可能なものにとってのカテゴリ的表現である。この表現(=力)は将来に我々が目を向けるときには多様な仕方で見られる。来るべき幸福を夢見ること、可能なものを空想しながら楽しむこと、疑惑と不安を感じることに、という風に。だが我々はこのように当てもなくさまよう自分を、鋭い角に向けて纏め上げる。そうしてわれわれは様々な可能なものからその中の一つを実現しようと決心する。この時生まれる目的表象は、現実にはまだないが今や実現されようとする新しいものを意味する。ここで重要なのは——意志に関するどんな理論とも無関係に——或る緊張があるということにある。この緊張を心理学は物理的に解釈しようとするかもしれないが、それは現実にはまだない何かを実現しようとする意図(Intention)の成立であり、それを実行するための手段を選んでそれを実行することなのである。生の連関がこうしたことを行う限り、この連関を我々は力と呼ぶ。…(中略)…精神科学が及ぶ範囲で我々にとって重要なのは全体であり、連関である。…(中略)…対象を概念で固定するとき、対象に時間に依存しない妥当性の性格を与えるものは論理的形式に属している。そこで、生と歴史の自由であることを表現する概念を作ることが必要なのである」(GS. VII, 203-4) (引用内( )は引用者の補足)。

15. 経験が他の経験へとたえず超越していくため、(理念的なものへの超越ではないので、「部分的な超越」(GS. VII, 28)という言葉でデルタイはこれを説明する)、そもそも体験の充実が問えないのではないかも知れない疑問に挙がるだろう。マックリールは、体験が充実しないというこの性質から外界の客観性とは区別された心的客観性を確保するために、この時点でのデルタイはフッサールの志向性理論を利用としたと解釈している。(マックリール『デルタイ 精神科学の哲学者』、大野篤一郎他訳、法政大学出版局、1993年、323頁以降参照)。

ールから離れていくのはまさにこの表現に対する捉え方の違いなのである。『論研』でのフッサール表現概念とディルタイのそれとの違いは、非客観化作用の表現に対して明白に表れる。

非客観化作用の表現とは疑問文や願望文、命令文といった仕方で表現されたものであり、それ自体は判断の性格を示してはいないものである。たとえば「天よ、我を救い給え」という願望文は、「これはリングである」という言明に見られるような真偽を問える内容を主張してはいない。フッサールはこうした種類の表現をボルツァーノの主張を検討しながら論じている。ボルツァーノの主張とは、「円の直径と円周とはどのような比例関係にあるか」という疑問文はその疑問を投げかける人がそのことを知りたいと思っているということを表現しておりそれゆえ真偽を問える表現である、というものである。

このボルツァーノの主張に対するフッサールの批判は、ボルツァーノが思考と表現の適合性の問題（適した言葉を用いているのか、誠実に語っているのか）と思考と事象の真偽性の問題（実際の存在を語っているのか）を混同している点にある（Hua. XIX/2, 738）。確かに、実際にはリングがほしいと感じていて「比例関係にあるのか」と表現するならばそれは間違った表現（うその表現）であるが、その間違いはリングを見て「これはリングではない」と語る間違った表現（誤りの表現）と一緒にされてはならない。とすれば、疑問文や願望文といった表現は事態を判断する言明とは区別されなければならないだろう。その後のいくつかの考察のもとでフッサールによって導かれる結論とは、結局のところ「非客観化作用の表現は客観化作用の言表またはそれ以外の諸表現の偶然的な特殊形態であり、しかも実用的には、とくに伝達にとっては非常に重要である」（Hua. XIX/2, 748）に過ぎないということなのである。フッサールにとって表現の意味とは常に表現が指し示す、真偽を問える事態であり、直径と円周の関係を問う疑問文の意味はあくまで直径と円周の関係という事態を指示しているのであって、疑問文は疑問を持つ人間がその問いを答えてもらうよう告知するのに用いられるにすぎないのである。

それに対してディルタイもまた同様にボルツァーノの主張を取り上げるのだが、その解釈はフッサールとは異なる。ディルタイはこの疑問文はそうして問う人の「状態」ではなく、数学的事態を確定しようとする「思考の動き」、対象へと関係づけられている「態度」を表現しているのだと主張する（GS. XXIV, 106ff.）。ディルタイはここでもやはりそうした表現が何かを指示しているという志向性を固守しているが、そうした表現は真偽を問えるような次元の言明ではなく、「普遍妥当的な言明の性格を持たない命題」（GS. XXIV, 105）なのであり、「感情と意志の態度のための表現の形式」（ibid.）がディルタイの問題なのである<sup>16</sup>。換言すれば、ディルタイが問題に

---

16. 対象の規定に関しての他者の見解との一致（普遍妥当性）は、その対象の規定が他者へ

しているのは、言明とそれが指示する事態との関係を通して論じられるべき普遍妥当性の次元ではなく、そもそも表現とは生にとって何かという次元なのである。

我々は先に二つの傾向性としての感情、すなわち、〈体験を知ること動機づける感情〉と〈体験に対して適切な表現を見つけ出そうとする感情〉について言及した。この二つの傾向性が目指すのがあくまでもその都度把握される体験の表現化であるならば、普遍妥当性を問える事態の言明ではなくその都度捉えられた感情や意志的態度のための表現に関するディルタイの視点との共通性は明らかとなろう。普遍妥当性を問えない命題をディルタイに問うよう導いたのは、その都度把握される体験とその表現であったのである。

体験を汲みつくしつつ表現しようとするということによって表現とは何か、という問いから始まったフッサール表現概念についてディルタイの批判が体験と表現の独自性をディルタイに改めて意識させたとすれば、表現概念に関するディルタイへのフッサールの影響もまた大きいといえよう<sup>17</sup>。

### 3. 感情と価値. フッサールとディルタイの価値論を問うとは何か

#### 3-1. 価値事象の本質としての感情

我々は様々なものを関連付け位階づけることを通して価値の世界を築いている。しかし、それら価値は、例えば宗教的価値や美術的価値、行為の価値、人生の価値、社会の価値、歴史の価値などの領域を各々作り上げていく。それら互いに異なっているものをなお価値の領域として呼ぶことを我々に許しているのは何であろうか。

これまで我々が確認してきた感情とその表現に関するディルタイの議論がその問いに答える手掛かりを与えてくれるかもしれない。漠然とした非志向的感情と思念

---

の問いとその応答という形で吟味されることになる。我々にとって日常的に使用されているはずであるこの関係について、ディルタイは『論研』の参照箇所 (Hua. XIX, 463-5) を示しながらコメントを付している。「私にはフッサールがわからない」(GS. XXIV, 108)。ディルタイのこの奇妙にも思えるコメントは、普遍妥当性を追求されるべき対象把握における表現とは次元の異なる表現をディルタイが問題にしていることを考えれば理解できるだろう。もちろんのこと、だからと言って、体験表現が私秘的であり他者には把握不可能であるため学的営為の領域ではない、というわけではない。そしてここから表現に対する「理解」が問題となる。

17. 興味深いのは、ディルタイが普遍妥当性を問う言明とは別の次元としての表現の中で感情表現の例として挙げているのが、単に命題に限らない他の表現媒体、すなわち「顔の表情、振る舞い、そして間投詞、最後に言語的命題」(GS. XXIV, 108) をも含んでいる点である。普遍妥当性を問えない感情表現についてのディルタイの把握のこうした広がりからすれば、表現が言語表現に限定されなければならない理由はなくなるだろう。そうだとすれば、表現媒体が、『解釈学の成立』(1900年)での言語から、『歴史的世界の構成』における身振りや歴史的建造物、社会組織を媒体へと拡張されることを許したのは、ディルタイが一九〇五年から一九〇八年頃の間で普遍妥当性を問えない次元で表現を考察したことによると考えてもよいかもしれない。そうであれば、フッサールがディルタイから引き受けた表現概念は、彫琢されて逆輸入された、フッサールのかつての表現概念だった、ということにもなるだろう。

する対象がはっきりしている志向的感情、そして〈体験を知ること動機づける感情〉や〈体験に対して適切な表現を見つけ出そうとする感情〉を同じく感情と呼ぶことを我々に許していたのは、それらいずれもが我々を触発するというこの点にある、というのが本発表での主張であった。漠然とした痛みはそれが何によって由来するのか、どう言った痛みなのか、我々に問うことを強要する一方、論文が完成するか気がかりに思うことは論文を作成している体験に関わる体験全体の想起や表現を我々にさせずにはおかない。さらにいえば、我々が様々な価値領域をなお価値と呼ぶのは、例えばある芸術作品が人間や神の価値を問うよう誘う場合のように、それらが各々他の領域を触発するからではないか。我々が日常的に価値の指標として様々な領域で使う語彙、例えば「さらなる創造を誘う」や「豊かさ、広がり」という語彙は、外的事象などの確定的なものを把握する認識事象とは異なる価値事象の特徴を象徴的に示しているのかもしれない。しかも、我々がこうした語彙を用いた対象の評価を「あの絵は奇麗だ」という評価と比べた際に前者の評価対象のほうがより好ましい価値を持つとしばしば認めようとするという事実は、この触発の働きが価値事象にとって本質的であるということを示唆しているのではないだろうか。感情がその度合いを通して対象の価値を測る価値基準の一つであるということを超えて考えてみれば、感情とはそもそも、価値事象が触発的な仕方存在するということを支えている、価値事象の本質を示しているのではないだろうか。

### 3-2. 価値を学問的に論ずること

こうしてわれわれはフッサールとディルタイを感情に関連する価値論において考慮する必然性をディルタイによる『論研』の受容と批判という点から確認してきたわけだが、さらに今度はフッサールによる『歴史的世界の構成』の受容と批判を今後論ずる必要がある。しかしそうした両者の影響関係は両者の価値論の持つ表層的な部分を取り出して見せるにすぎないかもしれない。このことを最後に強調しておきたい。

その後のフッサールはディルタイを相対主義として非難することになるが、それに対してディルタイは自らもまた相対主義への戦いを続けてきたと反論する。しかし価値論から見た場合、ディルタイが「絶対的価値」(GS. XXIV, 45)などはそもそも不可能だと主張するときディルタイが果たしてどこまでそうした自らの立場を弁護できたかについてはさらなる検討を必要とするし、他方、フッサールが「絶対的価値」(Hua. XXX, 295)の擁護を決して諦めてはいないことを考えれば、フッサールとディルタイの間の溝は深い。

しかし、両者の影響関係の問題のみならず、こうした相対主義か絶対主義かという次元の問題もまたひょっとすると両者の価値論についての表層的な考察にすぎないのではないか、という疑念を我々に喚起するのは、価値を学問的に論ずるのは何

のためか、その一点で両者は軌を一にしているという事実である。ディルタイからすれば「精神諸科学の発展にとって価値論が役立つのは、価値論が精神諸科学の基礎付けを明確にし、そしてまた実践的生や歴史記述などの価値諸規定を改善することにある」(GS, XXIV, 234) のであり、フッサールにしても「たしかに、人間性の高い価値は学問やあらゆる理性的反省を待たずして、共同体とそこに含まれる諸個人の有機的自然的な発達のうちにすでに存している。しかし、ひとたび人間が学問的認識の果実を味わったならば、比べようもないほど高く広範で、統合性を持った新たな理論的可能性や価値的可能性や実践的可能性が開かれる。…(中略)…学問的理性の支配」(Hua. XXX, 295) こそが最終的な目標であった。つまり、二人の哲学者をして価値論へと駆り立てたのは、なんのための学問か、何のために価値を問うのか、という学問の目的論なのである。そうであれば、相当の困難が予想されるのは確かだが、両者の価値論は単に両者の影響関係や比較を超えて両者の学問論全般についての考察まで広げられることで初めて、その意義を理解できるものとなるにちがいない。この点を確認して本論を終える。

以上